

## ■序 1

## ■第一章 流れる身体

## 1 二つの身体

■解剖と中国人 2 ■二つの図 7 ■二つの身体 13

## 2 流体としての身体

■場ないし空間としての骨 21

■流れる體と集積所としての脳 25

■皮膚—気の境界場 28

■流体のネットワーク—營氣・宗氣・氣街 31

■十二經脈 32

■奇經八脈 40

■十二經別・十五絡脈・孫脈 50

■宗氣と呼吸 53

■氣街 55

■筋筋—場を動かす流体 60

■臟—流体の宿る空間 62

肺 66

## ■第一章

## 1 広がり充ちる「いのう」

## 1 流体の内なる「いのう」

■「いのう」の生成 94

■「定心」「精の泉」 97

■医家 72

■道教徒 74

## ■第一章 注

## 1 流体の内なる「いのう」

■「いのう」の生成 94

■「定心」「精の泉」 97

■医家 72

■道教徒 74

## 2 「いのう」の身体化

■「いのう」の場と流れる「いのう」 113

■医經における「いのう」の身体化 115

■「いのう」のルート—「心術」という概念 119

■身体を出入りする「いのう」 122

■「物」と「いのう」 126

## 4 気による認識

		■「心斎」—虚心の認識論— 132	
		■第二章 注 137	
		■第三章 集合としての自己 141	
1 なにが自己なのか 142		■流れる身体と自己 142	
■流れる身体と自己 142		■分散する自己 144	
■分散する自己 144		■「自己」の相対性 143	
2 存思の身体論 146		■神々と「流体としての身体」 148	
■集合としての「自己」 146		■体内神と応報 151	
3 体内神という考え方 148		■「こころ」の神格化 150	
■「こころ」の神格化 150		■自然の神と体内神との対応 152	
4 マクロコスモスとミクロコスモス 152		■自然の神と体内神との対応 153	
■自然の神と体内神との対応 152		■自然の氣と体内神との対応 154	
■自然の神と体内神との対応 154		■「入れ子」としての神 158	
5 存思の諸技法 156		■体内神の存思 159	
■体内神の存思 159		■体外神の存思 163	
■体外神の存思 163		■「入れ子」としての神 158	
6 焼身とカオスの存思法 169		■「流れの神々」と身体の純粹化 173	
■第三章 注 181		■第四章 流れの創造と身体鍊金術 185	
1 流れの創造パターン 186		■身体の変容 202	
■運気の諸技法 186		■内氣と外氣 210	
■還流—行氣導引 191		■放散 194	
■負の放散—六字訣 196		■充溢—閑氣 187	
2 身体の純粹化 200		■内丹の思想 200	
■内丹の思想 200		■二つの内丹 206	
■二つの内丹 206		■足へ向けての深く長い呼吸—踵の息 211	
■足へ向けての深く長い呼吸—踵の息 211		■内丹としての胎息 216	
■内丹としての胎息 216		■津液の嚥飲による内丹 218	
3 内丹のプロセス 221		■竜と虎の交わり 222	

■ 第五章 中國的二元論		
1 二つの二元論		
■ 險陽カテゴリー	252	
■ 柔らかい二元論	259	
■ 風の病因論	264	
2 操作概念としての二元論		
■ 根源的な一元論	267	
■ 内丹と二つの二元論	276	
■ 柔らかい一元論と硬い一元論	269	
3 部分と全体		
■ 部分と位階	282	
■ 部分と全体	284	
4 自己と他者		
■ 夢と憑依	287	
■ 「無我」と「澄める原意識」	293	
■ 存思のまなざし	298	
第五章 注		
■ あとがき	306	
■ 主要資料版本表	310	
■ 索引		
299	287	282

■ 聖胎の温養—肘後飛金晶と小周天	227			
■ 玉液による還丹と鍊形	230			
■ 金液による還丹と鍊形	232			
■ 気から神へ—朝元	234			
■ 身体からの超脱	236			
■ 「純陽の身体」という考え方	238			
■ 存思と内丹	238			
■ 第四章 注				
■ 心に映する像を觀照し、火を起す	235			
251	252	251	241	238